

コリントの信徒への手紙Ⅰ 12 章 12-26 節 「共に苦しみ、共に喜ぶ」

人間の体というのは、驚くべき多様性と、驚くべき統一性を持った、神様の最高傑作であると言われていると思います。パウロは そのことを見つめつつ、それを、教会を語るための喩えとして用いているのです。けれどもパウロはここで、私たちの体がこうであるように教会も…、とは言っていません。12 節の「キリストの場合も同様である」と言われています。つまり「キリストの体」という一つの具体的な体について、説明しています。洗礼を受けることによって、私たちは一つの体、キリストの体へとどっぷりと浸され、その一部となる。人間的に見れば全く一つになれない者たちが、洗礼を受けることによって、主イエス・キリストと共に浸され、一つの体の部分となっているのです。そしてそれは「一つの霊によって」だと言われています。私たちの決意や意志によってではなく、聖霊の働きによるということです。私たちが一つであるのは、私たちの思いや意識が一つであるからではなく、洗礼において私たちをキリストの体へと浸した聖霊が一つであるからなのです。

15節の足が「わたしは手ではないから、体の一部ではない」とは、劣等感を抱き、僻んで言っている言葉に聞こえます。そのような僻み、いじけの思いに対してパウロは、17～20 節で続けて伝えているのです。「もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。…だから、多くの部分があっても、一つの体なのです」。みんなが同じである必要はない、みんなが同じ働きをするようになってしまったら、体というものは成り立たないではないか。私たちそれぞれに、それぞれの賜物、力、働きが与えられているのだ。それは神様が、様々な違った者たちによって一つのキリストの体を作り上げようとしておられるからなのだ。だから、自分に与えられている賜物を人のそれと比べて優劣を競うことはない。神様から与えられた自分の賜物を精一杯用いていけばそれでよいのだ、ということです。自分の賜物を人と見比べてしまうと、私たちは与えられている賜物の豊かさに気づくことができなくなってしまうのです。また、21節には「お前は要らない」と書かれています。先程とは逆に、人の賜物や働きを価値のないもの、役に立たないものとして批判し、軽んじることです。私たちは、優れたもの、能力のあるもの、美しいものを大事にします。しかし神様は、むしろ弱い者、見劣りのするものをこそ慈しみ、大事になさるのです。私たちがこうして神様の救いへと招かれ、教会へと集められているのは、神様が、弱く罪に捕えられている、問題に満ちた私たちを、それゆえにこそかえって深く慈しんで下さり、独り子イエス・キリストの十字架の死によって救って下さったからです。

パウロが語った最も大事なこと。それは、キリストの体の部分として、兄弟姉妹と共に歩むことです。私たちが自分の苦しみや喜びを、キリストの体の部分として、兄弟姉妹と共に歩む中で苦しみ、喜んでいくかということが大切なことです。人に尊ばれるような業績を上げることではなくて、キリストの体の部分としての自覚、姿勢を持って、他の部分である兄弟姉妹と共に歩むことなのです。そのように歩む所にこそ、「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶ」という御言葉が現実となるのです。